

## 平成 16 年度 学術研究助成報告

### アジア太平洋地域における非政府組織（第二トラック）

#### 外交の推進とアメリカの国際主義的民間団体

#### ー太平洋問題調査会と外交問題評議会の事例

佐々木 豊

本研究は、アメリカを代表する国際主義的な民間団体として知られる太平洋問題調査会と外交問題評議会が、第二次大戦前後から 1960 年代にかけての時期、アジア太平洋地域の国際関係の諸問題に関する討議やリサーチを行うことを通じて展開した政策的有意性を持つ非政府間外交（第二トラック外交）の内容に関して、一次資料を用いた実証的な分析を行うことを目的とするものである。

今回の特別研究助成金により、2004 年 8 月後半から 9 月前半にかけて、コロンビア大学（ニューヨーク市）およびアメリカ議会図書館（ワシントン、D. C.）において、太平洋問題調査会に関する一次資料（IPR Papers）、同調査会および外交問題評議会の活動に関わった主要人物（The Philip C. Jessup Papers）に関する一次資料収集を主として行った。これらの一次資料の収集と分析により、本研究が対象とする時期において両民間団体がアジア・太平洋地域の国際関係の平和的調整に向けて行った活動内容を、非政府間外交の視点から具体的に跡付けて検証することが可能となった。

上記の研究の具体的成果の一部として、昨年度、米国ラトガーズ大学に博士論文（“The Struggle for Scholarly Objectivity: The Institute of Pacific Relations and Unofficial Diplomacy from the Sino-Japanese War to the McCarthy Era”）を提出した。また相愛大学『研究論集』本号に「太平洋問題調査会と第二トラック外交」を発表した。この研究の継

続として、今年は学会発表（アメリカ学会）や第二次世界大戦中の日米関係を扱った論集（英文）に寄稿する予定である。

## 山東京伝の伝記研究

山本 和明

本研究は、大学の卒業研究以来、継続して行ってきた近世後期戯作者山東京伝の研究、特にその伝記的な研究を行うための基礎的な調査を行うものである。伝記に関わる申請者の研究としては、①「夢の憂橋―永代橋落橋一件始末―」（『国文論叢』第19号・1992年3月）②「山東京伝とく考証―戯作者一側面―」（『中西智海先生還暦記念論文集 仏教と人間』所載、永田文昌堂・1994年12月）③「京伝と和学―戯作者一側面―」（『江戸文学』19号・1998年8月）などがある。そうした成果を生かしつつ、研究を単著に纏める上で必要となる資料調査・再点検を主として行った。

これまでに科研費や本学助成金を受けて多くの資料を蒐集してきたが、紙焼本やモノクロのマイクロフィルムではつかみきれない点もあって、改めて原本による調査を行う必要が生じた。また、昨今の研究状況あるいは申請者自身の研究蓄積のなかで、新たに所在が確認し得た資料などを閲覧する必要が生じたことが申請にあたっての主な目的であった。併せて浅草寺境内「筆塚」や回向院「岩瀬醒墓」など、図版利用を考え写真撮影も行なうことも考えていた。

申請者自身が体調を崩したこともあって、当初のスケジュール通りには進まない点もあったが、東京都立中央図書館などを中心に精力的に資料調査を行なうことができた。目下、資料整理、執筆に向けての基礎データ整理を進めている。明治期における近世戯作の受容史的研究をもう一つの柱としている申請者にとって、特に、一枚摺りの資料などを新たに確認できたことは収穫だったと思う。今後継続して研究を進め、形としていきたいと考えている。

## 平成 16 年度 演奏会助成報告

### チェロ奏法の研究

斎藤 達男

斎藤建寛 チェロリサイタル (副題 愛の音)

2004 年 12 月 14 日火 午後 7 時開演

於) ザ・フェニックスホール

2000 年 12 月より 2003 年 6 月まで、半年に一度のペースで、チェロ音楽の聖典ともいふべきバッハの「無伴奏チェロ組曲全 6 曲」を毎回一曲ずつ織り込み、他の楽曲と合わせたプログラムによる「斎藤建寛リサイタルシリーズ全 6 回」を完了した。その折りの柱となったバッハの組曲は、短いもので 17 分、長いものでは 30 分の演奏時間を要し、またその他のソナタなども比較的規模の大きな作品が主体となったプログラムを構成したが、今回はまったく反対の視点からチェロ奏法の研究を試みた。すなわち演奏時間 3 分～6 分までの小曲のみ 18 曲でプログラムを構築するという企画である。曲目は過去 3 年間にわたって演奏したものの中から吟味して、次の 18 曲を選んだ。

〈前 半〉

エルガー：愛のあいさつ／クライスラー：シンコペーション／滝 廉太郎：荒城の月／フォーレ：エレジー／ドビュッシー：メヌエット／ラヴェル：亡き王女のためのバヴァーヌ／ピアソラ：リベル・タンゴ／グスタビーノ：バラと柳／ポッパー：ヴィトー

〈後 半〉

小林秀雄：落葉松／パラディス：シチリアーノ／サラサーテ：サパデアード／ポッパー：ロマンス／ファリャ：火祭りの踊り／マスネ：タイスの瞑想曲／カッチーニ：アヴェ・マリア／ピアソラ：アディオス・ノニ

ーノ／サン＝サーンス：白鳥

小曲の持ち味から専門色の強い雰囲気ではなく、大衆性を備えた明快な性質をもつ演奏会を目指した。選んだ18曲についてはチェロのオリジナル曲は4曲にすぎず、他はヴァイオリンなどの器楽曲、および声楽曲をチェロ用に編曲したものを、さらにヨーロッパにとどまらず日本人作曲家の作品も加えて弾いた。これらはプログラム全体をより色彩感豊かなものにするために貢献できたのではないかと思う。本番では3曲ずつまとめて演奏し、その都度ステージを転換して18曲の演奏の流れが聞き手にとって漫然とならないように心がけた。まとめた3曲についても、例えばフランス音楽に統一する、或いはラテンのカラーの濃いものを集める、3曲で緩急の流れのバランスを考えるなど、曲の配列、順番については大いに苦慮している。曲想の弾き分け、演奏時の力量の配分など、今ま経験したことのない企画内容を通じてチェロ奏法を新たな角度から研究することが出来た。具体的には18曲の異なる性質をいかに表現しうるかということから、ヴィヴァルトの種類の内味、音色の変化を求めてより微細な運弓法や運指法など、いくつかの課題を背負う状況から今後の研究テーマを自分の中でより明確なものとする事が出来た。

## 平成 16 年度 研究成果刊行助成報告

### 日中古代文芸思想の比較研究

孫 久富

本学の出版助成により、上記の研究は 2004 年 12 月に新典社研究叢書 163 として上梓した。本書（494 頁）の趣旨の概略は以下の如きである。

①中国古典詩歌・万葉歌・西洋のポエジーを媒材として、東洋と西洋、日本と中国の古代文芸観及び文芸思想における諸問題を取り上げ、詩歌創作の原理、文芸理論の形成と文化的土壌との関係、日本古代歌論（主に『古今集』の真名序と仮名序）における中国古代詩論に対する受容と非受容の現象及びその成因等を究明した。

②漢詩の「志」、和歌の「心」、西洋ポエジーの「靈感」という三つの詩歌生成の観念を軸にして、西洋叙事詩における「創作靈感」と東洋抒情詩における「志」と「心」、西洋叙事詩における「模倣再現」と東洋抒情詩における「心物融合」と「物我交感」、並びに中国古代詩論の「随物婉轉」と日本古代歌論の「寄物陳思」との比較を通して、東洋と西洋、中国と日本、という異なる文明と異なる民族間の古代詩歌創作の原理における相差点と相違点を究明した。

③中国古代詩論の中核をなす「志」と日本古代歌論の座標をなす「心」、文化的土壌と民俗風習の諸要素を集約する祭祀儀礼における「頌祖神」詩の比較を通して、「典楽」を司る「夔」と「海人部」を率いる「瓊女」の性質を究明し、その究明よって祭祀儀礼における「詩」の政治化と「歌」の脱政治化の源流と成因を探求してみた。

④『古今集』の「真名序」と「仮名序」が『詩経』の「大序」に対する受容と非受容の問題を取り上げ、中国古代音楽論と結びつけて、両国の政治風土と文化的土壌という側面から詩論と歌論の主旨の相違を指摘した。

⑤日中両国の古代文芸思想の特質を認証し得る実例として、叙事と抒情という両性質を持ち合わせる漢賦と万葉長歌を取り上げ、賦と長歌の発生時の状況、賦と詩との関係、長歌と記紀の長歌謡との関係、賦と長歌の構成上の特徴、賦の「不歌而誦」と『古事記』中の「讀歌」との類似性、『万葉集』中の「誦歌」と春秋時代の「賦詩」との相違等を論考した。

⑥賦と長歌に限らず、古代ギリシアの叙事詩をも視野に入れ、叙事詩と抒情詩との相違、漢賦と万葉長歌との相違等を詩歌形成史の面から探求した。

⑦賦と長歌を比較・論考するための基本データとして、漢魏六朝時代の賦と『万葉集』に収められている長歌を網羅して、主題・題材・内容等によってそれを分類し、幾つかの対照比較図表を作成した上で、『文選』に収められている賦と『万葉集』に収められている長歌の題材及び配列の問題を論じ、また対照比較図表によって顕現する賦と長歌の創作傾向と特徴を例示した。

⑧漢賦と長歌の創作指針及び主題の一つである「潤色鴻業」と「君王称賛」を取り上げ、双方の内容、構成、表現手法等における特徴を比較し、賦と『詩経』、『楚辞』との継承関係、「君王称賛」の媒体としての万葉の「殯宮挽歌」の特質、「殯宮挽歌」と中国古代の頌・誦・賛及び「郊祀歌辞」との受容関係乃至類似性、万葉長歌中の異色作と視される「高市皇子挽歌」の特徴と中国古代文学との受容関係等を考察した。

⑨漢賦の「都城・宮殿讚美」と長歌の「国見・国褒め」との比較を中心に、「国見歌」の遡源及び作品内容と創作状況についての考察を通して、従前の諸研究に疑問を投げかけ、「国見歌」の形成過程を、大陸の「望祀」及び「望祀」を題材とする『詩経』の詩作、楽府の「登歌」等と比較しながら追跡し、また「国見行事」における呪的歌謡と万葉の「国見歌」との関係性を、「登高能賦」という祭祀儀礼から文学創作への変貌と対比して考察し、両者の間に存在する受容関係を究明した上で、都城・宮殿讚美を題材とする賦と「国見・国褒め」を題材とする長歌の異同点を比較した。

⑩漢賦の政治的効能及び中国古代文学の功利主義的文学観を集約する漢賦の「諷諭勸諫」と長歌の抒情的性質及び日本古代文学の特質の一側面を

反映する「脱政治性」の問題を取り上げ、双方の源流を浚うことによって、賦と長歌の性質上における相違点を究明し、またその相違点及び賦の延続と長歌の終焉を成す要因の一つとして、「言語侍従」としての賦の作者と「宮廷歌人」としての長歌の作者を比較し、両者の性質と担う役割を、日中両国の政治的仕組みと政治風土及び文化的土壌等に置いて論考した。

本著は従来の研究の不足を補い、幾多の新視点との新論点を提示した。

---

報告書中で、本学に対する謝辞の文言を書かれた方がありましたが、編集委員会の判断で削除したことをお断り致します。